

## 県内産小麦の土壌型別による品質の相違

多田正敏

昭和55年産セトコムギについて香川県下の大川郡,香川郡,綾歌郡,仲多度郡,三豊郡の5地域から粘質土壌礫質土壌別にほぼ標準栽培された現地農家の小麦を各1検体宛計10検体を供試して品質調査を行った結果,次のとおりであった。

1. 播種時期に降雨が多く,播種期の遅延や苗立数の不足が目立ち,さらに収穫期にも降雨に遭遇したが,生育中期に天候が回復したため著しい減収にはならなかった。
2. 干粒重は30.2~35.0gの範囲で平均は33.1g,土壌型による差はなく,容積重は700~750g,平均728gであった。土壌型別では礫質土壌区の場合がやや高かった。また,外観概評では6段階の分類において,1~4までに該当したが土壌型による差は特にみられなかった。
3. 製粉歩留は粘質土壌区が64.64%,礫質土壌区が64.06%と前者がわずかに高かったが,各地域間では,かなり差の大きいものもあった。また,灰分移行率やミリングスコアでは礫質土壌区がやや高い傾向がみられたものの,これらの差の比率は1.6%以下で明確な相違はみられなかった。
4. ファリノグラムからドウの安定度,弱化度は礫質土壌区の場合がやや優れていた。エキステンソグラムの伸張度,面積では礫質土壌区がやや大きく,抗張力は粘質土壌区が大きい傾向がみられたが,その差はわずかであった。また,アミログラムでの最高粘度も礫質土壌区が粘質土壌区の877Buに対し,934Buと高かった。
5. うどんの食味による評価は粘質土壌区の試料において白さ,粘弾性,嗜好性等の劣るものがみられたが,比較的良好なものも存在することから一定の傾向が認められず,今後さらに多くの検討を待たなければならない。
6. うどんの嗜好性と各測定項目との相関係数は,食味での粘弾性>うどんの白さ>粉色相>原麦容積重>糊粘度の順に高かった。  
一方,各項目間の相関係数では,粉の色相とうどんの白さが0.955で最も高く,各うどんの白さと原麦容積重も0.702の高い相関を示した。